『ハムレット』におけるもう一人のヘラクレス

松浦芙佐子

1．　序

『ハムレット』(*Hamlet*, *Prince of Denmark* 1601)[1]におけるヘラクレス（Hercules）への言及はハムレット（Hamlet）の科白に登場する。母と再婚した父の弟クローディアス（Claudius）を「父上とは大違いの男だ」と貶める科白である。

My father's brother, but no more like my father
Than I to Hercules-- (1.2.152-53)

ヘラクレスは、ユピテルの息子で、世界を災いと獰猛な野獣から守ってきたギリシア神話の英雄である。ハムレットが自らをヘラクレスと比較するこの科白を、河合祥一郎氏(2000: 199-200)はハムレットが「ヘラクレスのようになろう」とする意志表明であると読み解く。ヘラクレスが十二の難行を成しえたように、ハムレットもヘラクレスのような英雄でなければ成しえない難行、すなわち、この世の外れてしまった箍を元に戻す難行を背負いこんだと両者を重ね合わせる。

確かに、ハムレットとヘラクレスには重なる部分が多い[2]。まず、ハムレットの父の容貌がヘラクレスの父であるユピテルに"the front of Jove himself" (3.4.56)と例えられる。ヘラクレスが神の子であるように、ハムレットも神に等しい父を持つ。この他にも、ヘラクレスは冥府からの帰還後、簒奪者に対峙するが、ハムレットはウィッテンベルクからの帰還後、簒奪者の叔父と対峙する。加えて、ヘラクレスが狂気[3]にとりつかれたように、ハムレットもまた、装われたものではあるが、狂気にとりつかれる[4]。ただし、これだけでハムレットをヘラクレスに重ね合わせることに懐疑的な見方もある。なぜなら、半神のヘラクレスとは異なり、死すべき定めの人間としてその運命に対峙していかなければならないからである（Miola 1992: 44)。

劇を詳細に検討していくと、ハムレットがヘラクレスに重ならない部分もある。その一つはハムレットが自分を「ネメアの獅子」に例える科白である。

My fate cries out,
And makes each petty arture in this body
As hardy as the <u>Nemean lion</u>'s nerve.　(1.4.81-83 以下、下線は筆者による)

ヘラクレスは、十二の難行の一つでネメアの森にすむ人食い獅子を退治する。ハムレットが自らを重ね合わせるのは、獅子を退治したヘラクレスではなく、ヘラクレスに退治される怪物の側である。河合氏はこの科白をハムレットの「自らヘラクレスになろうと

する決意の先取り」(205-6)と読み解くが、むしろハムレットが滅びへと向かう定めに対峙せんとする覚悟の現れではないだろうか。

ハムレットがヘラクレスでないとするなら、『ハムレット』におけるヘラクレスとは一体誰なのか。ネメアの獅子であるハムレットを滅びへ導くヘラクレスとは誰なのか。上の例えが語られるのは、ハムレットが父王の幽霊に対峙する場面の直前である。父王の幽霊によってハムレットは滅びへと向かう己の運命に対峙することになる。つまり、ハムレットを滅びに導くのは復讐を命じた父王の幽霊である。その意味で、父王の幽霊をヘラクレスと解釈して『ハムレット』を読み解くことはできないだろうか。

この小論ではハムレットの父を『ハムレット』におけるもう一人のヘラクレスとして読解を試みる。特に、1581 年にロンドンで出版された英訳の『セネカ悲劇集』(*Seneca His Tenne Tragedies*)の『狂えるヘラクレス』(*Hercules Furens*) と『オエタ山上のヘラクレス』(*Hercules Œtæus*)に描かれたヘラクレスとハムレットの父を比較検討する[5]。

２．セネカと『ハムレット』

『セネカ悲劇集』はルネサンスとエリザベス朝の劇作家に影響を与えた古典の一つである(Rees 1969: 119, Gillespie 2016: 360, Perry 2021: 2)。『ハムレット』にセネカからの直接的な引用があるわけではないが、その語調、抒情、修辞的文体等にセネカの影響は明らかで、セネカは『ハムレット』の基底（infrastructure）であるといわれる(Miola 33)。とりわけ『ハムレット』の父王の幽霊は、セネカの『アガメムノン』（*Agamemnon*）や『テュエステス』（*Thyestes*）の、冥府から現れ犯罪を暴く幽霊と重なる[6]。もちろん『ハムレット』の幽霊は非常に複雑な存在で、セネカの他、ヴェルギリウス（Virgil)、当時のプロテスタントとカトリック間の論争やフォークロアの影響なども見て取ることができる。特に、ガートルード（Gertrude）への裁きを天にまかせるよう息子に命じた点が、血を求めるセネカの幽霊とは大きく異なる(Miola 34-35)。幽霊の他にも、父子関係や母子関係にセネカの人物造形の強い影響が見出せる。『トロイアの女たち』(*Troas*)における生贄を求めるアキレス（Achilles)の幽霊とピラス（Pyrrhus)の父子関係は幽霊とハムレットの父子関係に、『アガメムノン』のクリュテメストラ（Clytemnstra)とエレクトラ（Electra)の母子関係はガートルードとハムレットの母子関係に重ねられる(Miola 44-52)。

1581 年にロンドンで出版された英訳の『セネカ悲劇集』は、当時セネカの手になると考えられていた 10 編の悲劇をトマス・ニュートン（Thomas Newton)が編纂したものである。最初のセネカの英訳は、ジャスパー・ヘイウッド（Jasper Heywood)の『トロイアの女たち』(1559)で、これに『テュエステス』（1560)、『狂えるヘラクレス』(1561)が続く。この他に、アレックス・ネヴィル（Alex Nevile）翻訳の『オエディプス』（*Œdipus* 1560)、ジョン・スタッドレイ（John Studley）翻訳の『アガメムノン』（1566)と『メデア』(*Medea* 1566)、これらと同時期に翻訳されたと考えられる『パエドラ』(*Hippolytus*)、『オエタ山上のヘラクレス』、ニュートン翻訳の『フェニキアの女たち』（*Thebais*)とトマス・ニュース（Thomas Nuce）翻訳の『オクタウィア』(*Octavia* 1566-67)が収められ

ている。このうち『オエタ山上のヘラクレス』と『オクタウィア』は今日ではセネカの作品とは考えられていない(Gillespie 359)。これらの英訳は必ずしもラテン語の原文に忠実ではなく、訳者による加筆や省略もある。加筆部分にはエリザベス朝の読者に訴える当時の価値観が表出していると言われる(Rees 125-30)。

英訳の『セネカ悲劇集』への言及は、ロバート・グリーン(Robert Green)の『メナフォン』(Menephon)のトマス・ナッシュ(Thomas Nash)による序文に見られる。

> yet English *Seneca* read by candle light yeeldes manie good sentences, as *Bloud is a beggar*, and so foorth; and, if you intreate him faire in a frostie morning, he will affoord you whole *Hamlets*, I should say handfulls of tragical speaches.
> (Smith 1950: 312)

ここでいう"*Hamlets*"とは、シェイクスピアの『ハムレット』ではなく、作者不詳の『原ハムレット』(*Ur-Hamlet*)であると考えられている(Calvo 2016: 899-903)。この序文は、ラテン語でセネカを読むことができない成り上がりの劇作家たちの独創性のなさ、模倣に対する痛烈なあてこすりであるが、当時の人々が原典の他、フランス語、イタリア語、英語の翻訳を通してセネカに触れることができたことがわかる(Rees 125, Miola 32-33)。セネカは当時のグラマースクールの標準的なカリキュラムではなかったが、シェイクスピアは英訳だけでなくラテン語のセネカにも触れていたと考えられている(Perry 2, 79-80)。以下では、英訳のセネカを参照しながら、ハムレットの父王が『ハムレット』におけるもうひとりのヘラクレスである可能性を探る。

３．ヘラクレスとしてのハムレットの父

『ハムレット』には、父王がヘラクレスを彷彿とさせる部分が各所に散見される。両者はともに英雄であり、その死は「世界の箍をはずす」と嘆かれる。ハムレットは "The time is out of joint" (1.5.189)と嘆き、クローディアスさえも兄の死によって "Our state to be disjoint and out of <u>frame</u>" (1.2.20)と語る。

この世界の箍が外れるイメージは、『オエタ山上のヘラクレス』でヘラクレスが自身の死について天上の父ユピテルに祈る科白に見られる。

> Now should I have resigned,
> (O Father) my inheritaunce of Plutoes dungeon blynd:
> Heaven <u>frames</u> should here and there be brast, and eyther poale should crack,
> Why sparest thou the starres and letst thy Hercles go to wracke? (231)

上の『ハムレット』の科白はこの科白と、世界の箍が外れるイメージに加え、"frame"という語も共有している。この他にも、ハムレットの父とヘラクレスの造形に、冥府からの帰還と簒奪者への対峙、妻子の惨殺、恋敵による毒殺、そして息子による母への評価

など、さまざまな共通性が見いだされる。以下、順に検討していく。

１）冥府からの帰還

冥府から帰還したヘラクレスは、リュクス(Lycus)による義父殺害と王位簒奪、妻メガラ(Megara)への求婚を知る。他方、ウィッテンベルクから帰還したハムレットは、叔父の戴冠と母との再婚を知る。この他所からの帰還が、ヘラクレスとハムレットを結びつける共通項として挙げられる(Miola 44)。しかし、ハムレットが帰還したのは冥府からではない。冥府から帰還して城壁に姿を現すのは父王の幽霊である。加えて、簒奪者によって王妃を奪われたのも父王である。このように考えると、ヘラクレスと比すべきはハムレットではなく、むしろハムレットの父であると思われる。もっとも、簒奪者に死を与えるのは『狂えるヘラクレス』ではヘラクレスであるが、父王の幽霊は自ら手を下すことはできない。息子を手先とし復讐を果たすことになる。

次に、冥府との関係で『狂えるヘラクレス』と『ハムレット』を比較すると、双方の作品で冥府にいる人への強い思いが語られる。まず、『狂えるヘラクレス』では、妻メガラと育ての父アンピトリュオン(Amphitrion)によって、ヘラクレスの冥府からの帰還が祈願される。アンピトリュオンの “returne thou safe, repayre to thine in haste” (17)との祈りにメガラが続ける。

> Ryse up my spouse, and darknes deepe repell'de of helly shade
> Breake up with hand, if no way may for thee kept backe bee made,
> And passage be shut up, returne with world uprent by might. (17)

しかし、リュクスは冥府のヘラクレスを「大地の重みが押しつぶしている」“Him great things braggig, darknes deepe of tartare presse ful low” (22)と、彼らの祈りは無駄であると嘲笑する。

他方、『ハムレット』で冥府の父への思いを語るのは息子のハムレットである。簒奪者リュクスがアンピトリュオンとメガラの祈りを否定したように、ハムレットの思いは母と叔父によって不自然な悲しみであると否定される。まず、ガートルードは父を悼むことをやめない息子に、人の死すべき定めの理を説く。

> Good Hamlet cast thy nighted colour off,
> And let thine eye look like a friend on Denmark.
> Do not forever with thy vailèd lids
> Seek for thy noble father in the dust.
> Thou know'st 'tis common, all that lives must die,
> Passing through nature to eternity. (1.2.68-73)

続けてクローディアスもハムレットの喪の悲しみは行き過ぎたものであると否定する。

'Tis sweet and commendable in your nature Hamlet,
To give these mourning duties to your father;
But you must know, your father lost a father,
That father lost, lost his, and the survivor bound
In filial obligation for some term
To do obsequious sorrow; but to persever
In obstinate condolement is a course
Of impious stubbornness, 'tis unmanly grief,
It shows a will most incorrect to heaven,
A heart unfortified, a mind impatient,
An understanding simple and unschooled. (1.2.87-97)

このように、冥府にある人への思いが簒奪者によって否定される点で『狂えるヘラクレス』と『ハムレット』は重なり合う。

もう一つ、ヘラクレスとハムレットの父との共通点に、簒奪者による王妃への求婚がある。これはともに簒奪者が己の権力基盤を盤石なものにする政治的方策の一つである。まず、『狂えるヘラクレス』では、簒奪者リュクスは王の娘メガラを妻とすることは自らのテーバエでの王権を固めるためであると述べる。

Not I of native countrey bowres possesse the auncient right
Unworthy heir, nor yet to me are noble men of might
The grandfathers, nor stocke renownd with titles hie of name,
But noble vertue: who so boastes of kinred whence he came,
Of others vertue makes his vaunt, but got with fearful hand
My sceptors are obtaynd: in sword doth all my safety stand.
What thee thou wotst agaynst the will of cytesyns to get,
The bright drawne sword must it defend: in forrayne countrey set
No stable kingdome is. But one my pompe and princely might
May ratify once joynd to me with regall torche ful bright,
And chambers Megara: of stocke of such nobility
Let upstart state of myne take shape. (19)

『ハムレット』でもガートルードは先王の娘で、彼女との結婚で地位を固めたのはハムレットの父もクローディアスも同じである。『ハムレット』の素材作品の一つであるサクソ・グラマティカス（Saxo Grammaticus）の『デンマーク史』(Historiae Danicae）には、ガートルードにあたるゲルサ（Gerutha）が王ロリック（Rorik）の娘であることが記されている(Bullough 1973: 61-62)。

２）妻子を滅ぼす英雄

ヘラクレスとハムレットの父はそれぞれの妻子の死によっても関連付けられる。『狂えるヘラクレス』では、ヘラクレスはユピテルの正妻ユノーの呪いで正気を失い、自らの妻と幼い子供たちをむごたらしく惨殺する。他方、『ハムレット』においてハムレットの父は幽霊となって冥府から訪れ、息子にクローディアスへの復讐を命じる。ハムレットの父は、ヘラクレスのように直接手を下して妻子の命を奪うわけではないが、息子に復讐を命じることで間接的に妻と子を滅ぼすことになる。

まず、『狂えるヘラクレス』では、冥府から帰還したヘラクレスは簒奪者リュクスを殺害した後、狂気に取り付かれ、わが子を次々に手をかけ、最後に妻メガラをユノーと誤認してその命を奪う。放り投げられた息子の脳味噌は床を濡らし、妻の首は胴体からもぎ取られる。その凄惨な様子はそれぞれアンピトリュオンの言葉で語られる。

O wicked gylt, full sad, and eike abhorde to looke upone,
His humble right hand caught he hath, and raging rounde about
Him rolled twyse, or thryse hath cast, his head resoundeth out,
The sprinkled houses with the brayne of him throwne out are wet. (41)

And now likewise his heavy club is shaken towarde his wyfe:
He broaken hath the bones, her head from blocklyke body gone
Is quight, nor any where it stayes, dar'ste thou this looke upone
To long lyv'de age? (42)

『ハムレット』にはこれほど凄惨な殺戮は描かれてはいないが、それでも狂気が人々を滅ぼす点が『狂えるヘラクレス』に重なる。ヘラクレスの狂気がユノーの呪いによるものであるのに対し、ハムレットは自ら選んで狂気を装う。これは叔父の罪の確証を得るための策の一つである。しかし、狂気を装う中で、クローディアスと誤ってポローニアス (Polonius)を刺殺する。これは連鎖的にオフィーリア (Ophelia)の狂気と死、レアティーズ (Leartes)の復讐と死を招く。レアティーズの復讐に乗じてハムレットを毒殺するため王が用意した毒でガートルードも命を落とす。これらの死は全て父王の幽霊が命じた復讐に端を発するのであるから、ヘラクレスのように妻子を滅ぼすのはハムレットの父ということになる[7]。

３）恋敵による毒殺

ヘラクレスとハムレットの父を関連付けるもう一つの要素は、その命を奪ったのが恋敵によって与えられた毒薬である点である。まず、『オエタ山上のヘラクレス』でヘラクレスを殺害した毒は、ヘラクレスの妻デイアニラ (Deianira)が媚薬と信じてヘラクレスに与えたもので、もとはヘラクレスの妻を奪おうとしてヘラクレスに殺害されたケンタウロスのネッスス (Nessus)に由来する。ネッススはヘラクレスに射殺されるが、その死

の間際、ネッススはその血を媚薬と偽ってデイアニラに渡す。その後、ヘラクレスがオエカリアとの戦に勝って、王の娘イオレ (Iore)を側女として伴って帰還したとき、デイアニラはイオレに妻の座を奪われメガラのように夫に殺害されることを恐れ、ネッススの血を媚薬と信じて夫の衣に浸み込ませる。その衣を身に着けたヘラクレスは苦しみながら死ぬ。

『オエタ山上のヘラクレス』ではヘラクレスが毒に侵され死にゆく様が詳細に描かれる。ネッススの血はヘラクレスの手足と肉を疫病のようにむしばみ、無敵と思われたヘラクレスは呻き苦しむ。それをデイアニラに伝えるのは息子のヒュルス (Hyllus)である。ヘラクレスが毒の浸みた服をはぎ取ろうとすると、服と皮膚が一つに溶け合い、体もはぎ取られてしまう凄惨な様子が語られる。

and he himselfe doth rent
His limmes, and ryflyng them, with mighty hand a sunder teares,
And strives to strip him selfe of all th'apparell that he weares,
And onely this was it, of all the thinges that I do know,
That past the power of Hercules yet standes he pulling so
And plucketh of his limmes withall the vesture doth not linne
To bring of lumpes of filthy flesh, the shyrt stickes to the skyne. (222)

ヘラクレスの死をテーマとする悲劇であるため、死の苦しみの描写が繰り返される。以下はヘラクレス自身が毒にさいなまれる様子を語る科白である。

What Scorpion scrapes within my Mawe? what crailing Crab I say
With crooking cleaze to comber mee, from scorching zone returnes,
And hoat within my boyling bones the seathing Marowe burnes.
My River whilom ranke of bloude my rotting Lunges it tawes,
And teareth them in shattred gubs, and filthy withered flawes.
And now my Gall is dryed up, my buring Lyver glowes,
The stewing heate hath stillde away the bloude, and Jove hee knowes
My upper skin is scorcht away and thus the Canker stronge
Doth eate an hole that get it may my wretched Limmes amonge,
And from my frying Ribs (alas) my Lyver quite is rent.
It gnawes my flesh, devowers all, my Carkas quite is spent,
It soakes into the empty bones, and out the juyce it suckes
The bones by lumps drop of while it the joyntes a sunder pluckes. (234)

はらわたが燃え、胆汁が涸れ、熱が血を涸らす様子、毒が皮膚を嚙み、脇腹をむさぼり、骨の髄を吸い上げ、骨が崩れる様子が事細かに語られる。同様に、『ハムレット』でも毒

薬にむしばまれた父王が死に至る描写が幽霊の科白に登場する。

Sleeping within my orchard,
My custom always of the afternoon,
Upon my secure hour thy uncle stole,
With juice of cursed hebenon in a vial,
And in the porches of my ears did pour
The leperous distilment, whose effect
Holds such an enmity with blood of man
That swift as quicksilver it courses through
The natural gates and alleys of the body,
And with a sudden vigour it doth posset
And curd, like eager droppings into milk,
The thin and wholesome blood. So did it mine,
And a most instant tetter barked about,
Most lazar-like, with vile and loathsome crust,
All my smooth body. (1.5.59-73)

耳に注がれた毒薬は血液を凝固させ、皮膚をかさぶたで覆う。ヘラクレスに比べると簡略ではあるが、毒の効果の描写がヘラクレスの影響を思わせる。

４）母の行為を評する息子

最後に、『オエタ山上のヘラクレス』と『ハムレット』に共通するのは、母の行為を評する息子の存在である。ガートルードは夫の弟と再婚はするが、夫の殺害に関与してはいないようである。それでも、ハムレットは母ガートルードに批判的である。他方、ヘラクレスの妻デイアニラは誤って毒の浸みた衣をヘラクレスに与えその死を招くが、息子ヒュルスは必ずしも母を非難しない。母親の行為を「あやまち」であるとし、それゆえ「罪はない」と死を求める母を押しとどめる[8]。

I pray you mother spare your selfe, forgeve your fatal lot,
If ye offend of ygnoraunce, then blame deserve yee not. (227)

しかし、ヒュルスは、母の死を止めることは「父に対する罪」となり、母の死を許せば「母に対する罪」となるという葛藤に揺れ動く。

O miserable piety, if I my mother save
I sin agaynst my father then, but if unto the grave
I let her goe, then toward her a trespas foule there lyes.
And thus (alas) on eyther syde great mischiefe doth aries,

And needs her purpose must be stayde Ile hie and take in hand
To stop her despret enterpryse and mischiefe to withstand. (229)

最終的にデイアニラは自死し、その知らせはヒュルスによってヘラクレスに伝えられる。そこで、責めるべきはデイアニラではなく、ネッススであることが告げられる。

The silly woman was more woe then ye that bide the smart.
Ye wil release some part hereof for pitty in your hart.
For greefe of you with her owne hande, alas her selfe she slew,
Thus more then ye do aske of her, she doth her doyng rewe.
Yet is it not your Wyfes misdeede that brought you to this plight,
No nor my mothers traytrous hand hath wrought this deepe deceit
This treason Nessus did contrive whom yee did pay his hire,
With arrow shot into his Ribs for rape of Deianire. (242)

他方、ハムレットは母の行動に常に批判的である。１幕２場、ホレーショ(Horatio)との再会の場面でホレーショのいう「父の葬儀」を「母の結婚式」に言い換える言葉遊びには母の再婚に対するハムレットの苦々しさがにじみ出ている。

HORATIO My lord, I came to see <u>your father's funeral</u>.
HAMLET I pray thee do not mock me fellow student,
I think it was to see <u>my mother's wedding</u>.
HORATIO Indeed, my lord, it followed hard upon.
HAMLET Thrift, thrift, Horatio. The funeral baked meats
Did coldly furnish forth the marriage tables. (1.2.176-81)

城壁の場面で、父王の幽霊から母の罪は天にまかせるように命じられる。

But, howsomever thou pursues this act
Taint not thy mind, nor let thy soul contrive
Against thy mother aught. Leave her to heaven
And to those thorns that in her bosom lodge
To prick and sting her. Fare thee well at once. (1.5.84-88)

にもかかわらず、ハムレットは母を批判せずにはいられない。母と対峙する 3 幕 4 場のクローゼットの場面では、母の再婚を「天も顔を赤らめる」所業と非難する。

GERTRUDE What have I done, that thou dar'st wag thy tongue
In noise so rude against me?

HAMLET Such an act
That blurs the grace and blush of modesty,
Calls virtue hypocrite, takes off the rose
From the fair forehead of an innocent love
And sets a blister there, makes marriage vows
As false as dicers' oaths. Oh such a deed
As from the body of contraction plucks
The very soul, and sweet religion makes
A rhapsody of words. Heaven's face does glow;
Yea, this solidity and compound mass,
With tristful visage as against the doom,
Is thought-sick at the act. (3.4.39-51)

母を責めるハムレットの激しさは、ヘラクレスの息子ではなく、むしろ『アガメムノン』のエレクトラから受け継いだものである(Miola 49-50)。オレステス (Orestes)を連れて来るよう命じる母クリュテメストラに対して、エレクトラは殺した父を連れてくるよう言い返す。

CLY. Goe fetch him out of hande.
EL. Fetch thou my father unto mee. (137)

"fetch"という語の反復が母娘のやり取りの緊迫性を高めている。次のガートルードとハムレットの反復構造には、より先鋭化された対立の効果が表出している。

GERTRUDE Hamlet, thou hast thy father much offended.
HAMLET Mother, you have my father much offended. (3.4.9-10)

同じ構造の文の反復は、ガートルードの"thy father"とハムレットの"my father"との対比をより際立たせる。同時に、ハムレットと母親の二人称代名詞の選択にも二人の距離感が描き出されている。

４．結語

ヘラクレスもハムレットの父王もその死が世界の箍をはずすと嘆かれる英雄である。ここまで両者を重ね合わせる解釈の可能性を、冥府からの帰還と簒奪者への対峙、妻子の惨殺、恋敵による毒殺、そして母の行為を評価する息子という共通性から探ってきた。

では、なぜハムレットではなく父王がヘラクレスなのか。本稿冒頭で引用した"My father's brother, but no more like my father / Than I to Hercules"という科白がそれを解く鍵となる。半神ヘラクレスと神々に比される父王は神の領域にあり、対するハムレ

ットと叔父が属するのは人間の領域である。ハムレットは父王の幽霊に復讐を命じられても、幽霊の存在を疑い、叔父の罪の確証を求め思い悩む。兄を殺害し王冠と王妃を手に入れたクローディアスもその罪に悩む姿を垣間見せる。他方、ヘラクレスは自らの敵の命を奪うことをためらわないし、ハムレット王もノルウェー王を一騎打ちで打倒する。英雄たちは自らの行動に思い悩むことはない。神々しい英雄の一直線な行動の対極にあるのは、取るべき行動や犯した罪に思い悩む人間の姿である。ハムレットは思い悩み行動に移せない意識を“conscience does make cowards of us all” (3.1.83)、“A thought which, quartered hath but one part wisdom / And ever three parts coward” (4.4.42-43)と語る。英雄の行動との対極を象徴するのがこれら“coward”という言葉である。父王をヘラクレスと重ね合わせることで、ハムレットの内省的な人間らしさが浮かび上がるのである。

注

[1] 『ハムレット』の引用は The New Cambridge Shakespeare: *Hamlet*, *Prince of Denmark*, updated edition, ed. Philip Edwards (2003)による。『セネカ悲劇集』の引用は 1581 年出版の Thomas Newton 編纂の英訳による。

[2] 作品を取り巻く外的状況もヘラクレスとハムレットの関連性を堅固にする。河合氏(213)は、シェイクスピアらが本拠地としたグローブ座の旗印が天球をかついだヘラクレスであったことを紹介している。ハムレットの科白には「乱れた球体」すなわち「狂った頭」を肩に担ぐというグローブ座の旗印を彷彿とさせる一節がある：whiles memory holds a seat / In this distracted globe (1.5.96-97)。

[3] 『アガメムノン』を締めくくるカッサンドラ (Cassandra) の科白に “The fransy fits of fury fell on you shall also light” (139)という狂気の訪れへの予言がある。「狂気」(fury)とはオレステス、すなわち、母と情人を殺害し、父の敵を討つことになる息子である(大西 155)。スタッドレイの英訳には、オレステスの帰還と復讐を予言する Euribates の翻訳が最後に加筆されている(Newton 139-41)。

[4] ヘラクレスの狂気が装われたものであったという見方は『オエタ山上のヘラクレス』に示される。側女に妻の地位を脅かされたデイアニラは、メガラと子供たちのように自分も殺されるのではないかと恐れる：hee dissemble franticke fits, to bend his ayming bowe, / And deaths wounde on my chylde, and me with bloudy hands bestowe? (209)。

[5] 言うまでもなく、シェイクスピアがヘラクレスの素材とした作品はセネカ以外にも多数ある(Bate 215)。

[6] 幽霊はサクソやベルフォレには登場しない。

[7] もしハムレットをヘラクレスに重ねる解釈を取るなら、ハムレットは狂気の中でその妻を殺したと言える。ヘラクレスが妻子を殺害したように、ハムレットも狂気を装う中で「ハムレットの妻」になるはずであったオフィーリアの死を招くのである。ガートルードのオフィーリアの死を悼む科白に“I hoped you shouldst have been <u>my Hamlet's wife</u>” (5.1.211)とある。

[8] 過失は罪ではないという考え方は『狂えるヘラクレス』で妻子を惨殺したヘラクレスに

対しても示される：Who ever yet to ignoraunce hath geven name of cryme? (49)。

参考文献

Bate, Jonathan. *How the Classics Made Shakespeare.* Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2019.

Bullough, Geoffery. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare,* Volume VII Major Tragedies: *Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth.* London and New York: Routledge, 1973.

Calvo, Clare. "Thomas Kyd," in Smith, Bruce R., ed. *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare: Shakespeare's World, 1500-1660*, Volume One. New York: Cambridge University Press, 2016.

Gillespie, Stuart. *Shakespeare's Books: A Dictionary of Shakespeare Sources,* Second Edition. London: Bloomsbury, 2001, 2016.

Miola, Robert S. *Shakespeare and Classical Tragedy: The Influence of Seneca.* Oxford: Clarendon Press, 1992.

Newton, Thomas, ed. *Seneca His Tenne Tragedies Translated into English, edited by Thomas Newton anno 1581 with an Introduction by T. S. Eliot.* Bloomington & London: Indiana University Press, 1964.

Perry, Curtis. *Shakespeare and Senecan Tragedy*. Cambridge: Cambridge University Press, 2021.

Rees, B. R. "English Seneca: A Preamble," *Greece & Rome*, Vol. 16, No. 2 (Oct. 1969), 119-133.

Shakespeare, William. *Hamlet, Prince of Denmark*, updated edition. Philip Edwards ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1985, 2003.

Smith, G. Gregory, ed. *Elizabethan Critical Essays* Vol 1. Oxford: Oxford University Press, 1904, 1950.

河合翔一朗『謎解き『ハムレット』――名作のあかし』　東京：三陸書房、2000.

セネカ，ルキウス・アンナエウス『セネカ悲劇集１』小川正廣，高橋宏幸，大西英文，小林標訳　京都：京都大学学術出版会，1997.

セネカ，ルキウス・アンナエウス『セネカ悲劇集２』岩崎務，大西英文，宮城徳也，竹中康雄，木村健治訳　京都：京都大学学術出版会，1997.